

敢闘賞のメダルを祖母に

なかの
中野 麗子

あの日、祖母は泣いた。そっと、心の中で。右ひざ前十字じん帯損傷、全治八ヶ月——。

昨年の春休み、北海道のスキー場での転倒だった。いつも完璧に滑る祖母が、雪のゆるんだ斜面に足を取られたのだ。病院で応急処置を受け、私たちはバス、飛行機、タクシーを乗り継ぎ、藤沢の自宅に帰った。あの時はとにかく必死で、車椅子の祖母を気遣いつつ、どう帰り着いたのか、はつきり思い出せない。

祖母は、私が生まれた時から一緒に過ごし、買い物も水泳も旅行も一緒に楽しむ。そして、書道と算数を、私に厳しく教えてくれる。そんな活動的な祖母が、七十年近い人生の中で、初めて車椅子のお世話になった。私は、自分が祖母の車椅子を押す現実を認めがたく、悪い夢であつてほしいと、胸が締めつけられた。

少しでも段差があると、車椅子は進まない。私は、自分の非力さを思い知った。祖母に甘えて頼るわりには、生意気な口を利く私に反省を促すための、神様からの試練なのかとさえ思った。祖母が、さびしそうな顔で

「色々と面倒をかけて、悪いわね。」
と言った。私は（普段から、もつと素直な子だったら、こんなことにならなかつたのかも知れない。）と、自分を恨んだ。祖母の車椅子を押すたび、美容室に行けず伸びた白髪や、小さく丸くなった背中を痛々しく感じた。

しかし、祖母は強い人だった。祖母の前向きな生き方を、私は、今まで気付けずにいた。あまりに身近すぎたのだ。まるで、真つ暗なトンネルから、出口の一筋の光に突き進むように、回

復への祖母の努力には勢いがあつた。

「一つ一つ乗り越えて、自信をつけなくちゃ。」
祖母は、私の運動会にもピアノの発表会にも来てくれた。私は、祖母の気持ちに応えようと、走り走って三位にくだき込み、一つの音も弾き間違えまいと、全神経を指に集中させた。私は、学んだ——真面目に努力を重ねる人に、神様は必ず報いてくださる、と。祖母が、家の階段を昇り降りする足音が、いつしか「トントン」と、軽やかになつていった。

あの日から一年後。私たちは、同じゲレンデに立っていた。私は、背筋の伸びた祖母の後ろ姿を見守つた。祖母が、きれいなターンで滑り下りていく。そして、あの斜面を無事通過した。私の鼻の奥が、ツーンとした。嬉し涙があふれるのを、必死でこらえたせいで。

あの日乗り越えて、祖母は笑つた。満面の笑顔が、白銀の世界に輝いていた。

「みんなのおかげで、ここに戻つてこられたわ。本当にありがとう。」
祖母に、先にお礼を言われてしまった。来春、私は中学生だ。その前に、宣言しよう。

「おばあちゃま、努力の大切さを教えてくれてありがとう。おばあちゃまの笑顔が大好きだから、私は意地っ張り卒業します。」

そして、この一年間を思いぬいた祖母に、私から敢闘賞のメダルを贈りたい。